

## 『海人手古良集』考

— 恋部の構成と地名歌を中心に —

牛山 睦子

## 一 はじめに

『海人手古良集』は百首歌の体裁をとる家集である。成立年は未詳だが、撰関期に成立する初期百首群に併称される。その顕著な特徴の一つには地名の多用があり、とりわけ「あはぬ恋」「あひての恋」の両部に、地名による様々な意匠が展開している。

先行研究では、題号や作者、集の性格などが論じられてきた。<sup>①</sup> 注釈も公刊され、<sup>②</sup> 歌の読解は進展しているように見えるが、部立構成をはじめ検討しなければならない問題は残されている。

そこで本論では、「あはぬ恋」「あひての恋」という二部構成、地名(国名や未詳地名を含む)の多用、という二つの面に注目し考察する。また、初出の地名歌については、「あはぬ恋」「あひての恋」のそれぞれの節で、特筆事項として取り上げる。

底本は、定家本の転写本で、歌数九五首の書陵部本(五〇一・四

四八)を用いた。<sup>③</sup> 題号表記には「海人手古良」「海人手子良」の二つがあるが、底本に従い「海人手古良」とする。なお、作者に関しては、藤原清輔、藤原定家の記述に拠り、<sup>④</sup> 現在通説とされる藤原師氏と一先ず考えておく。

本集の部立は、「いのり」部まで明記されるが、84(以下、アラビア数字は本集の歌番号)以降は記されない。便宜的に「物名」「題詠」「増補」と考え、構成を左のように捉えた。

1～39 四季(「春」の部立表記なし)。

1～10春、11～20夏、21～29秋、30～39冬。

40～49 あはぬ恋

50～58 あひての恋

59～65 わかれ

66～74 無常

75～83 いのり

84～87(物名)

物名の「とし」「月」「日」「とき」と題する四首に続き、88～94に題詠七首（花、春の花に驚むつる、夏はたるみぎはに火をともし、池水かがみにいたる、たまのひかりて井のなかにあり、あふさかのせき、秋の月みづにうかぶ）を配する。物名は、四季部同様時間を表し、題詠の歌群は、溶暗と言うべき家集の終結を意図するか。好忠百首などが、物名に干支、つまり時間と方位（空間）を詠み込んだ方法とは異なり、本集の物名には空間的要素がなく、地名によって空間を表そうとしたかのである。巻軸95は本集のみの増補とされ、首肯すべき指摘と考える。なお、本稿では地名や国名の組み合わせなどを総称し「地名」と記す。これは、次の『和歌文学大辞典』の「歌枕」項の指摘を踏まえるためである<sup>(6)</sup>。

一首の歌の中で、その歌のイメージの基本を形象する機能をはたす重要な歌語、またその語を集め解説した書物をいう。そして平安後期に入るころから、特に歌によく詠まれる諸国の地名、またその地名を集めた書物をさすことが多くなる。古く「地名」の語は、「古の人、多く本に地名をおきて、末に思ふ心をあらはす」（新撰髓脳）、「よろづの草紙、地名よく案内知り見つくして、その中のことばをとり出づるに」（源氏物語・玉鬘）などの用例からして、歌を詠むときによく用いられる言葉やその解説書をさし、作歌のための手引書というべきものであった

本集恋部の地名の用法は、地理的、地域的な意識を重視したとは思われない。知識と感覚とによる地名の把握であり、地名がもたらすイメージや音の響きを利用し、掛詞・畳語・頭韻などを創り出し、歌意を複層化する。つまり地名の修辭的な用法や技巧を実験的に追求した試行と考える。この詳細は、後の恋部の読解において検証する。

## 二 恋部の構図

### （1）「あはぬ恋」一〇首、「あひての恋」九首

先ず、「あはぬ恋」「あひての恋」の全歌を示す。傍線部は整定箇所。

あはぬ恋

- 40 いかで猶みてのかさまもえてしがなわがする恋のかずのしるしに
- 41 あふさかのうたかた人は陸奥のさらに名こそをなづくるかもし
- 42 なげきつつかたしく袖にくらぶれば清見が関の波はものかは
- 43 よとともになべてけしきをみちのくのさはこのみゆといはせてしがな
- 44 すはの海のみまひを詠めつつけふひねもすにをりくらすかな

- 45 君こふる涙も袖にひたちなるいろづくそのみねばなるらし  
 46 きみしいなばいないなこそはしなのなるあさまが山と成りやは  
 てなむ  
 47 あづまちはまなのはしのはやくより深さ心はくみてしるらむ  
 48 かひもなきいくたのうらをあさりつつなみだながらにかへる釣  
 舟  
 49 たそかれに涙の玉をながめつつねむらで夜はにあかすともし火  
 あひての恋  
 50 こゆるぎにさし出でてみれば天の原浪間にこゆるふねの我かな  
 51 いはばしをつくりさしけむかづらきの神にけならぬ朝ぼらけか  
 な  
 52 ひまもなく涙に袖をぬらしつつ駒にまかせてかへるよなよな  
 53 かよへどもつねにまどふをむさしなるさらの山べのしるべせよ  
 君  
 54 わりなきをしなむふしなむ美作やくめのさら山いまさら君  
 55 あひてあはぬ歎きするがのふじのうらにこがれてかよふあまの  
 舟かも  
 56 わくらばにあふはあふかはみちのくのしのぶもぢずりかぞふば  
 かりを  
 57 忍びねにまたしのびねのかさなりてひるまなくそでくちぬ  
 べし  
 58 あふ坂のみちにかきほはこえながらまだゆるされぬ下ひもの関

43…底本表記「さはこの身よ」を「さはこのみゆ」と整定。

44…底本表記「神のみまる」は、「る」と「ぬ」の誤り、さら  
 に「ぬ」と「ひ」の混同と見て「神のみまひ」と整定。

56…底本表記「あふかはあふか」を「あふはあふかは」と整定。  
 なお、整定の詳細は各歌の読解で記す。

本集の部立の先進性は、「あふ」を描かず、恋のエネルギーを「あ  
 はぬ」と「あひて」という独立した二構成の内に凝縮したところに  
 ある。これは、初期百首群において、本集が初めて用いた恋の構成  
 である。比較対象としたのは、好忠百首、順百首、重之百首、恵慶  
 百首、『千類集』である。本集との影響関係は現在のところ未詳で  
 あるが、本集以外は恋を一括する。これは、後掲の表1・2に示し  
 た。

初期百首群に共通する部立は四季と恋である。作者はその他の部  
 立にも創案を発揮し、「うらみ」「いはひ」「わかれ」「無常」「いのり」  
 「心細」などの部立によって、人事・心情を補充する。

先行研究では、恋の二分制という部立の構図に対し、歌数以外に  
 は踏み込んだ言及がなされていない。恋部の内容は、逢瀬に先立つ  
 「あはぬ」と、逢瀬の後、捗々しい進展のない「あひて」の二つの  
 状況に括られ、直接「あふ」場面は欠落している。つまり、逢う時  
 間を描かず、その前後の状況・心理に、恋の本意を見出していると  
 言えるだろう。

本集以前の『古今集』恋部を例に見る。『古今集』恋部は、恋の時間的な進展に沿って分類され、「逢う場面」を含めて恋部を形成している。鈴木宏子はその内容を、「逢わざる恋」(恋一・二)、「逢う恋」(恋三)、「逢いてのち逢わざる恋」(恋四・五)と三段階に分類する。その上で鈴木は、「逢う恋」の最高潮部は、初めて逢う一夜の一七首(六三二～六四八番歌)と少なく、しかも逢ってともに過ぐす場面の歌は、六三四～六三六番歌の三首だけであるとす<sup>(8)</sup>。すなわち『古今集』恋部は、実際に逢う、言わば房事の場の歌を収録するが、前後に鈴木という「逢わざる恋」「逢いてのち逢わざる恋」を配置して、恋の全貌とする。恋の全要素を具備した、完成形という陣容である。

しかし、『海人手古良集』は逢う場面そのものを設けない。逢うに恋の究極を見ていない。むしろ、逢う前と後こそが詠むべきものとして、「あはぬ恋」と「あひての恋」(その実「あひてあはぬ恋」の内容)を並置する。「あはぬ恋」では、逢えぬゆえの渴望・懊悩を、「あひての恋」では、逢瀬が叶ったがゆえの焦燥・飢渴を詠出する。つまり、充足することのない情や恋の不連続を、詠むべき恋の本意として両部に集約するのである。

## (2) 「あはぬ恋」「あひての恋」

そもそも、「あはぬ恋」「あひての恋」という対の部立の源流はどこにあるのだろうか。

本集に先立つ私家集において、「あはぬ恋」「あひての恋」が対に並ぶ構成は、『躬恒集』(V)<sup>(9)</sup>及び『忠見集』に見える。

まず『躬恒集』七首(表記は適宜改めた)を吟味しよう。

あはぬ恋

あはんとはおもひわたれどふじかはのつるにすまはずはかげも見えじを(七)

思ひつつまだいひそめぬわが恋をおなじ心に人はしらなん(八)

見ぬ人の恋しきやなぞおぼつかな誰とかしらん夢にみる(ゆ)

とも(九)

あひての恋

別れては後ぞわびしきにこり江のそこともしらぬありかとふ身

は(一〇)

ひたすらに忘れもぞするわすれ草見ずやあらまし恋はしぬとも

(一一)

久かたの雲井はかりにあひしより空に心はなりにし物を(一二)

ひさにこぬ人を待つにやあへぬらんときはの恋と我はなりぬる

(一三)

『躬恒集』歌は、すべて『左兵衛佐定文歌合』(平定文主権。以下

『定文歌合』と略称)に収められる(語句の相違は僅少)。「あはぬ恋」

七・八・九は、『定文歌合』の「不会恋」、二〇・二二・二六(すべて右)

の順に見え、「あひての恋」の一〇～一二は、「会恋」の三〇、

三八、三六(すべて右)に見える。一三のみが「不会恋」の左二一

に配され、右二二が躬恒の歌であるので、二一・二二の左右に躬恒の歌を番える組み合わせとなり、机上の撰歌合の様相を呈する。

『定文歌合』では、四季の後に、「不会恋」一〇首（一九～二八）、「会恋」一〇首（二九～三八）が並ぶ（三八が巻軸）。詠者は、左に壬生忠岑、在原元方、平定文、右に坂上是則、紀貫之、凡河内躬恒と記されるが、躬恒七首と元方一首以外に作者名表記はない。この多くが勅撰集に採られる。<sup>10</sup>『定文歌合』から一部を抜粋する。

不会恋

左 元方

おとはやまおとにききつつあふさかのせきのこなたにひとをま

つかな（二七）

右

そのはらやふせやにおふるははきぎのありとてゆけどあはぬき

みかな（二八）

会恋

左持

あふことのいまはかたほになるふねのかざままつ身はよるかた

もなし（三二）

右

ねでまちしはつかのつきのつかにもあひみしことをいつかわ

すれむ（三三）

「不会恋」の左の二七、元方の歌は、『古今集』恋一・四七三に、

第五句を「年をふるかな」として入集。噂に聞きながら、逢坂の関のこちら側で、逢うこともなく人を待つことだ、の意。「音羽山」が「音（噂）」を導く。音羽山は逢坂の関よりも都側に位置するため、逢うことができない意となる。右の二八は、『新古今集』恋一・九九七に「平定文家歌合 坂上是則」と詞書・作者を記し、第四句「ありとはみえて」として入集。左の「音羽山」「逢坂の関」に対し、右では、信濃国の「園原」「布施屋」、伝説の樹木「帚木」を用い、逢えぬ恋を詠む。これら二首は元方、是則の家集には見えず、採歌元は不明である（三二、三三も同）。

「会恋」は歌意から「あひてあはざる恋」と判る。三一は『続古今集』恋四・一二二七に「真文家歌合歌」「忠岑」で、第四句を「かぜまつほどは」として入集。「かたほ」は「片秀」と「片帆」を掛ける。逢うことが今となつては不十分で、帆を片寄せて走る舟のように風の吹く時を待つ身は、頼むところもないの意。三三も『続古今集』恋三・一一七三に「定文家歌合に 坂上是則」とあり、初句「ねでまちし」として入集。三二は「はつか」に「二十日」と「僅か」を掛ける。寝ずに待っていた八月二〇日の月のように、僅かに関係を結んだことを、いつ忘れようか、忘れない、の意。陰暦二〇日の月は、夜更に月の出を待つ「更け待ち月」である。とすれば、初句は「寝で」が相応しい。

『定文歌合』には「旧作を含めた撰歌合ではなかったか」との指摘もあり、同歌合は「躬恒集」を撰歌資料とした可能性があるろうか。<sup>11</sup>

『定文歌合』の歌題配列、「不会恋」「会恋」の各一〇首、地名を用いた一部の詠作などに、『海人手古良集』恋部の先蹤要素も見出せる。続けて、『忠見集』の「あはぬこひ」「あひてのこひ」題、四首も検討する。

あはぬこひ、いりてかつ

かぎりなきこひをのみしてよのなかにあはぬためしをわれやの  
こさむ（六八）

あひてのこひ、いりてぢ

ゆめのごととかよるしもきみをみくるまつまもさだめな  
きよを（六九）

あはぬこひ

くれごとにおなじみちにもまどふかなわがみのうらにこひはも  
えつつ（八〇）

あひてのこひ、

わかれてはくるるもしらずこひしなばきみやほなきものをお  
もはむ（八一）

この四首は、「麗景殿の歌合に」（五九詞書）として、五九から六九までを左方、七〇から八一までを右方に分けた一連の中にある。

六八・六九は左、八〇・八一を右とする。「麗景殿の歌合」とは『麗景殿女御歌合』（莊子女王主催、以下『麗景殿』と略）のことで、春季の景物の歌題の後に「不会恋」「会恋」を置く<sup>(12)</sup>。

忠見が『麗景殿』の歌題にに応じて詠んだことは明らかで、『忠見

集』六八の「いりてかつ」とは『麗景殿』の判詞である。忠見の出詠歌は、実際は『麗景殿』に四首（六七「ふぢ」、七二「風」、六八、六九）のみ採られ、六八は『麗景殿』左二二「不会恋」（初句「かひもなき」）に、六九は左二三「会恋」（『麗景殿』は左二四を勝）に収められる。八〇・八一は採られない。

恋題は歌合に必ず設けられるものではなく、まして恋の二分割題は『定文歌合』や『麗景殿』に見えるものの、稀少例と言える。

例えば、恋題のある歌合は、平安前期の『寛平御時后宮歌合』（宇多天皇母后の班子女王主催）、『寛平御時中宮歌合』（宇多天皇母后の温子主催か）などで、これらは四季の後に、人事としての恋を最終題とする。

平安中期では、延喜一三年（九一三）『亭子院歌合』（宇多法皇主催）も、春・夏・恋と恋題が最後にある。また、村上天皇主催の天徳四年（九六〇）『内裏歌合』は、一二題（春・夏の景物・花鳥など）二〇番から成り、以後の歌合の規範とされるが、最終題は「恋」とするのみである。

このように見ると、初期百首歌群において、本集の「あはぬ恋」「あひての恋」は恋のテーマを二分した独自構成の部立と指摘できる。また、本集に通底する『躬恒集』『忠見集』の「あはぬ恋」「あひての恋」両題の歌は、歌合の撰歌資料とみなすことができる。つまり、「あはぬ恋」「あひての恋」の歌題・部立を遡ると、歌合に辿り着くと言えるのではないだろうか。

表1 初期百首の部立比較

名称	項目	総歌数	部立と歌数
㊦好忠百首… 『好忠集』所収		102	四季(春11、夏10、秋10、冬10)、恋10、 沓冠31、*物名(千支)20。
①順百首… 『好忠集』所収		100	四季(春10、夏10、秋9、冬10)、恋10、 沓冠31、*物名(千支)20。
㊧重之百首… 『重之集』所収		103	四季(各20)、恋10、うらみ10、いはひ3。
㊨『海人手古良集』		95	四季(春10、夏10、秋9、冬10)、あはぬ 恋10、あひての恋9、わかれ7、無常9、 いのり9、*物名4、題詠7、増補1。
㊩恵慶百首… 『恵慶法師集』所収		101	四季(各10)、恋10、沓冠31、*物名(千支) 20。
㊪『千穎集』		104	四季(春11、夏11、秋15、冬10)、恋12、 離6、怨10、無常6、心細10、雑13。

㊨が恋歌を重視することは、他のほぼ倍の歌数一九首によっても顕著である。

\*印の物名は、『古今集』に做ったものだろうか、『古今集』と異なるのは、㊦㊧㊨が十千(時間と方位)の名義を詠み込み、時間と空間の要素を部立中に位置づけたと考えられることである。㊩は物名四首で年月日などの時間を表すが、方位を表す語はなく、集全体に散らした地名をその代替としているか。

表2 初期百首の地名歌(㊦㊧㊨は略称)

名称	項目	全体の歌数	部立の歌数
㊨海人手古良		38	あはぬ恋 9 あひての恋 8
㊦好忠		22	恋 1
①順		24	恋 3
㊧重之		29	恋 8
㊩恵慶		25	恋 7
㊪千穎		23	恋 2

### 三 あはぬ恋

#### (1) 「あはぬ恋」とは

歌における「あはぬ恋」とは、どのような意味なのであろうか。全く逢えない「あはぬ」なのか、あるいは、逢った後の疎遠な状態の「あはぬ」なのか、いずれであろうか。例歌を基に考えたい。

本集に先だつ最古の歌合『民部卿家歌合』の歌題に「あはぬ恋」が見える。歌合の規模は小さく、「あひての恋」題は見えず、郭公一〇番、あはぬ恋二番から成る。

十一番 あはぬ恋 左

世の中の常のことやおもふらんなみだもことにわきていづる

は(二〇〇)

右勝

あふことぞをしからずしていのちをばあはぬに我よかつすな

(ママ)(二二一)

十二番 左勝

あひがたみめより涙はながるれどこひをばけたぬ物にざりける

(二二)

右

夢にだに見ぬ人こひにもゆる身のけぶりは空にみちやしぬらん

(二三)

十一番は、「あはぬ」を世の常と思いつつも、涙を滂沱と流すに

対し、逢うことは惜しくない命、逢わないのに惜しく願ひ求めるなどある。十二番は、逢い難いので涙は流れるが恋の火は消すことができないに對し、夢にさえ見ぬ人を恋しく思い燃える私が身の煙は、きつと空に満ちているだろうとする。四首とも、恋しいのに全く逢うことが叶わない苦しみを詠む。ここでの「あはぬ恋」は、逢う以前がテーマである。

私家集において、歌中に「あはぬ恋」の語句を用いる例は、『深養父集』の一首が早い（歌題や詞書はない）。

なにかよにくるしき物と人とはばあはぬ恋とぞいふべかりける  
(五八)

世の中でとりわけ苦しいものは何かと人が尋ねたならば、「あはぬ恋」と言うべきであった、の意。全く逢うに至らないのか、逢った後逢えなくなつたのか不確かだが、この歌の「あはぬ恋」とは、逢えず相手に恋い焦がれる状態とみるのが穏当と思われる。

ところが、逢った後の間遠な状態を「あはぬ」と詠んだ歌も、『村

上天皇御集』の贈答に見える。

おなじみやす所久しくまゐり給はざりければ

から衣いまはなるべきほどにさへたえつつあはぬ恋はくるしな

(九七)

御返し

かくしてもきたるぞつらきからころもたゆるたもとをたれかむ

すばん(九八)

「おなじみやす所」は、村上天皇更衣・広幡御息所（源計子）のことで、前の贈答九五に「ひろはたの宮す所につかはす」の詞書がある。九七は、長らく参内しない御息所にあて、唐衣が馴染むはずの頃にさえ、じつとこらえ、「あはぬ」恋は苦しいと訴える。九八は、「唐衣」と「たゆ」の語を受け、こうして唐衣を着て内裏に参りましたが、切れた袂（絶えた関係）をいつたい誰が結ぼうとするのでしょうかと返す。九七の「あはぬ恋」には、寵愛とその消滅が見える。

(2) 「あはぬ恋」五首

それでは、本集の「あはぬ恋」はどのように読めるのであろうか。

まず、次の五首について、修辞も指摘しつつ歌意を確認したい。

初出の地名歌は次章で取り上げ、地名のない歌は後述する。

40 いかで猶みてのかさまもえてしがなわがする恋のかずのしるし

に

42 なげきつつかたしく袖にくらぶれば清見が関の波はものかは

- 45 君こふる涙も袖にひたちなるいろづくそのみねばなるらし  
 47 あづまぢのはまなのはしのはやくより深き心はくみてしるらむ  
 48 かひもなきいくたのうらをあさりつつなみだながらにかへる釣

舟

40は願望で始まる。何とかあの人を見る笠の隙も得たい、私が恋い慕う回数を受け入れてくださる、笠間の神の靈験としてと、せめて見るだけでもとの願いを叶えてほしいと望む。笠の隙間と笠間とを掛詞とする。笠間は常陸国の笠間社。同時代の『実方集』五四に、「あめにますかさまのかみのなかりせばふりにしなかをなにしたのままし」が見え、男女の仲を、雨と天、降ると経るとを掛けて詠んでいる。

42は『新統古今集』恋二・一一三〇に、大納言師氏詠として入集<sup>13</sup>。

『新勅撰集』以降も勅撰集入集歌の作者はすべて「師氏」である。42は、嘆きながら独り寝の袖が濡れるのに比べたら、清見が関の高い浪に濡れることなどたいしたことではない、意。「片敷く」は、

自分の片袖だけを敷き独り寝する意で、「あはぬ恋」の趣意に沿う。

清見が関は駿河国の所在。『深養父集』六一、また『詞花集』恋上・

二一三・平祐挙として、

むねはふじ袖は清見が関なれや煙も波もたたぬ日ぞなき

と見える。『更級日記』は、寛仁四年、京へ向かう途次「清見が関は、片つ方は海なるに」と記す<sup>14</sup>。

45は歌意が取りにくく、(逢ってこれないから)恋い慕う涙で袖

が濡れている、袖にうつる涙の模様は常陸にある嶺の色づいた葉のようであるらしい、となろうか。涙で袖に文様ができると詠む。

47の遠江国の浜名橋は東路の要衝。『更級日記』に「浜名の橋、くだりし時は黒木をわたしたりし、このたびは跡だに見えねば、舟にてわたる」と、下向時に存した橋が流失していると記す。歌意は、東路の浜名の橋のように、昔から深く思う心があることを知っているでしょうという懇願である。「はまなのはしのはやくより」と「ハ」音の繰り返して韻律を整え、早くからの恋心に重点を置く。

48は、貝もない生田の浦を漁っては、その甲斐もなく、涙ながらに帰って行く釣り舟のようだ、の意。貝と甲斐、生田と幾多の掛詞に、舟の縁語(貝、浦、漁り)を用いる。手応えのない恋の空しさを、獲物のない釣り舟に喩えた歌である。

これらは、一目見たい願望、独り寝の涙など、いまだ逢えぬ恋の懊悩を詠んでいる。

### (3) 「あはぬ恋」初出の地名歌

「あはぬ恋」の初出の地名歌は四首である。複数の地名や国名と地名を並べるといふ新基軸や、関、湯、湖、山などの選択が変化に富む。

なお、歌に用いた地名の一覧は、後掲表3にまとめ、簡単な解説を加えたので、そちらも参考にしてほしい。

41 あふさかのうたかた人は陸奥のさらに名こそをなづくるかもし

43 よとともになべてけしきをみちのくのさはこのみゆといはせてしがな

44 すはの海の神のみまひを詠めつつけふひねもすにをりくらすかな

46 きみしいなばいなこそはしなのなるあさまが山と成りやはてなむ

41の「あふさか」「陸奥」「名こそ」と三つの名称を一首に盛り込むのは初見。「あふさか」「なこそ」の二箇所を詠んだ歌は、『蜻蛉日記』上巻に作者詠として、

こえわぶるあふさかよりもおとにきくなこそをかたきせきとしらなむ

がある。兼家が「あふさかのせきやなになりちかけれどこえわびぬればなげきてぞふる」と、逢えずに嘆き過ごしていると寄越した歌へ、作者は越え悩む逢坂の関よりも、「来るな」という名の勿来の関の方がさらに越えがたいと知ってほしい、と返す。双方が関所名によって思いを伝え合う。

41も「あふさか」「なこそ」を「逢ふ」「な来そ」の掛詞とし、さらに「陸奥」の国名を取り込む。第二句の「うたかた」に、副詞の「少しの間」の意を響かせ、はかなく消えやすい喩えとする。歌意は、逢うことが泡のようにはかない人は、さらに私を陸奥の通り難い関のように「勿来」（来ないで）と名付けるかもしれない、となる。逢えないことに加え、女の拒絶を恐れる。唐紙本のみ「かたき人に

は」とあり、「逢うことが難しい人」と判りやすい。

43 「みちのくのさはこのみゆ」は、国名「みちのく」を冠して初出となる。「さはこ」は女性名を想像させる。底本は「さはこの身よ」だが、『拾遺集』物名・三三七・よみ人しらず歌に「あかずしてわかれし人のすむさとはさはこの見ゆる山のあなたか」とあり、「さはこのみゆ」とした。「御湯」に「見ゆ」を掛ける。歌意は「私の人生とともにあなたのすべての様子を、陸奥のさわこの御湯というように、見ることができると言わせたい」となる。現状がそうではないことを詠んだ、渴望の歌。『夫木抄』雑八・温泉・一二四九七には「さはたのゆ、陸奥」「同（家集）大納言師氏卿」と分類され、歌は「よとともになげかしきみをみちのくのさはたのみゆといはせてしかな」とある。

諸本の異同が著しいのは、44の第二句である。底本・慶応本・中之島本・内閣本は「神のみまるを」、唐紙本は「衣のさきを」、穂久邇本は「神のみさるを」とあるが、いずれも意味が定まらない。『夫木抄』雑八・崎・一二一五六に「これもかみざき、信の」「家集、大納言師氏卿」とあり、「すはの海のこれも神ざきながめつつけふ日ぐらしにをりくらすなみ」と見える。曾根誠一は『夫木抄』が「かみざき」を地名として理解するのは、「御神渡」の別称「神幸」を誤認したものであろうという（『試注』）。

稿者は当初、冬の諏訪湖の結氷現象（御神渡）を詠んだ歌と考え、第二句を「神のわたる」と整理した。御神渡は、湖上の氷の盛り上

がりを、諏訪大社の上社の男神が下社の女神のもとへ逢う道とみなすもので、久保田淳も当該歌について御神渡を詠んだ早い例として<sup>(16)</sup>いる。

だが、管見の限り、御神渡の歌の初例は、『堀河百首』凍・九九八・藤原顕仲、

すはの海の氷の上のかよひちは神のわたりてとくるなりけり  
と思われ、また御神渡の起源も定かに言いがたく、「神のみまひ（見舞）」と整理し直した。歌意は、諏訪の湖の神の訪問をぼんやりと物思いにふけりながら見、歌に詠んでは、今日一日をあなたのこと  
を思い暮らすことよ、となる。神にこと寄せて終日相手を思う歌である。この44「神のみまひ」については今後も検討したい。

46の「しなのなるあさまが山」は、国名と山の名とを組み合わせた初例となる。底本のみ「あさまが山」とある。歌例は「あさまの山」が多く、「が」は初例。くずし字の「の」と「が」は近似するため、誤写の可能性も考えられる。国名を付けず「あさまの山」「あさまのたけ」「あさまがたけ」の形で、単独に詠まれる場合が多い。「あさまのたけ」が信濃の所在であることは、既に『伊勢物語』第八段に、「信濃なるあさまのたけにたつけぶりをちこち人の見やはとがめぬ」と見える。

46では「あさま山」は「あさまし」を導く。「いないな」は「いな（否）」の強めで「いやいや」の意。「こそ」と「は」は強意の係助詞。（未だあはぬ）あなたが立ち去るなら、いやいやそれこそ、

私は信濃にある浅間山の名のように、あさましく、情けなくなり果ててしまう、となる。

「あはぬ恋」の地名は、撰津国の「生田の浦」を除き、そのほとんどが東国の地名である。ここでは地理的な遠近の均衡をとることよりも、地名からの連想と、掛詞、縁語、比喩などの修辞の駆使や、同音反復、豊語、頭韻などによって、意味の複層化を図ることに主眼を置くと考えられる。

以上、地名と歌意を見てきたが、本節の「あはぬ恋」は、「未だ逢えない」苦しさを恋の本意として表すのである。

#### 四 あひての恋

(1)「あひての恋」とは

「あひての恋」では、逢瀬が叶った後の心情を詠む。ここに恋の喜悅はなく、逢瀬には至ったものの、その後の難渋、不安など、逢ったがゆえの焦心を詠出する。これは、本集に限らず、第二節で示した『躬恒集』『忠見集』などもほぼ同様である。『源順集』の「あひての恋」にも、

あはぬこひ

哀てふことのはもこそきこえくれよそに消えなんことのかなし

さ(二四〇)

あひての恋

我ながらくらべわびぬる心かないまさへなほやこひしかるべき  
(二四一)

と、自分ながら「あはぬ」と「あひて」の心を比べあぐむと、逢えた後「なお恋しい」と思う自身を見返した詠がある。

つまり、「あひての恋」という歌題や部立は、「あひてあはざる恋」の意を含み、「あはぬ恋」のそれと相對する。「逢ふ」は通過点として省かれ、恋の本意はその前後にあると見ているのである。

『賀茂保憲女集』では、「逢ひての恋」一首に、「逢ひて不逢恋」五首を並置する。

「あひてあはざる恋」題は、平安後期以降「逢不遇恋」「遇不逢恋」などの表記で数多く出現する。さらに、細分化した恋題は、平安後期の『堀河百首』に見られる。初恋、不被知人恋、不遇恋、初逢恋、後朝恋、会不逢恋、旅恋、思、片思、恨の「恋十首」である。だが、これらも内容的には、結局、「あはぬ」と「あひて」という二つの範疇に含まれるのである。

## (2) 「あひての恋」四首

本集の四首を読解する。初出の地名歌四首は、次章で読解する。

- 50 こゆるぎにさし出でてみれば天の原浪間にこゆるふねの我かな  
54 わりなきをしなむふしなむ美作やくめのさら山いまさらに君  
56 わくらばにあふはあふかのみちのくのしのぶもぢずりかぞふばかりを

57 忍びぬにまたしのびねのかさなりてひるまもなくそでくちぬべし

50は、相模国の地名「こゆるぎ」に「越ゆ」を掛け、「浪間にこゆるふねの我かな」と、逢瀬後の別れの心情を、大海原を越えてゆく舟に喩える。こゆるぎの磯に漕ぎ出してみると、大海原の浪間を越える舟のように心乱れる私、の意となる。

54は美作国の「くめのさら山」と「いまさら」で、「さら」の反復リズムを生む。恋は道理に合わないので、苦しくて死んでしまいうのだが、くめのさら山ではないが、今また更に共寝をしようと、逢つて後のさらなる苦しさを述べ、願望を表明する。

56の第二句は底本の他、唐紙本など多くは「あふかはあふか」とするが意味不通。『古今集』秋上・一七八・藤原興風の「契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは」に拠って整理した。「みちのくのしのぶもぢずり」は、『伊勢物語』初段や『古今集』恋四・七二四・河原左大臣「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」と容易に結び付く語句である。たまに逢うのは逢うことにならない、陸奥のしのぶもぢずりの言葉のごとく、逢えないで堪え忍ぶ日々を数えるばかりになっていると、逢えぬ日を数える。

57は「ひるまなく」に昼間と、涙の干る間が無いことを掛ける。昼という語で、夜の逢瀬を連想させる。「蛭間」の所在は尾張か。昼間は人知れずしのび泣く日々が重なり、乾く間もなく泣いたため

に、涙で濡れた袖が朽ちてしまいうた、の意。

多様な地名を歌に取り込むことは、新たな歌を出現させる試みである。イメージ操作と同時に歌意を多層化する。地名が歌の韻律を活性化し、意味を複層化する反面、例えば「あはぬ恋」45や「あひての恋」54、56などのように意味が取りにくいということも生じる。

(3) 「あひての恋」初出の地名歌

51 いはばしをつくりさしけむかづらきの神にけならぬ朝ぼらけかな

53 かよへどもつねにまどふをむさしなるさらの山べのしるべせよ

君

55 あひてあはぬ歎きするがのふじのうらにこがれてかよふあまの

舟かも

58 あふ坂のみちにかきほはこえながらまだゆるされぬ下ひもの関

51の「いはばし」と「かづらき」の組み合わせは、これが初出である。岩橋を作るのを途中でやめた葛城の神と異ならぬ、夜明けの

わびしさであるよ、の意。逢えたけれど、いつ仲が絶えるかとの不安を詠む。葛城の一言主神の伝説は、男女の仲絶えや物事が成就しない比喩に用いられ、当該歌以降、「いはばし」「かづらき」を組み合わせて繰り返し詠まれた。東宮女蔵人左近(小大君)の代表歌「いはばし」のよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛木の神」(『拾遺集』雑賀・一二〇一)が著名。

53、武蔵の「さらの山」の所在地は不詳。歌例も見えない。唐紙

本をはじめ他本は「ささのやま」とするが、これもまた不詳である。並ぶ54の「くめのさら山」と混同したか。通うけれどいつも道に迷ってしまう、武蔵にあるさらの山のほとりの道案内をして欲しい、あなた、の意。「山べ」と「しるべ」が脚韻となる。第五句の「しるべせよ君」の「君」の呼びかけは、『万葉集』では女性が男性に対するものであったが、『古今集』以降、男女いずれも、異性に対してもまた同性に対しても、親しみをもって言う場合に使われるようになったという。<sup>(1)</sup>とは言え、45の「君こふる」と同様、男性が女性に呼びかけた「せよ君」の歌例はさほど多くはない。

55は、逢つてのち、逢えない歎きをする、駿河の富士の浦に海人が舟を漕いで通うように焦がれ通う意となる。「漕ぐ」が「焦がる」と繋がって響き、行動と内省的な感情とを併せて表現する。55の「あひてあはぬ歎き」の措辞は、「あひての恋」の意味を端的に表している。

58の「あふ坂」と「下ひもの関」の組み合わせも初見。歌例も少ない。「あふ坂」に「逢ふ」を響かせ、逢瀬の垣根は越えたけれども、最後の関を通ることは許されていない、つまり共寝することは許されていない意である。「下ひもの関」は、陸奥の関所で、『能宣集』二五七に「うつつともゆめともみえぬほどばかりかよはばゆるせしたひほのせき」と「ひも」が「ひば」の交替形で見える。下紐を解くとは相手との同衾を意味し、下紐が自然に解けるのは思う人と逢

える前兆と詠まれている。<sup>(18)</sup>この歌を「あひての恋」の掉尾に置き、逢ったがゆえの心理的飢餓や焦燥を表し、「あひての恋」部を統括するのである。

#### (4) 一首の欠落

ここで、「あひての恋」の歌が一首欠落しているとの指摘を取り上げておきたい。

「あはぬ恋」一〇首、「あひての恋」九首と、両部の歌数は揃っていない。「あひての恋」が九首であることについて、曾根は、58の次に一首の欠落があると指摘する。<sup>(19)</sup>これは、中之島本に「一首不足歟」と注記があることに拠るものである。また、『新注』にも「先の『あはぬ恋』では、最終歌において歌枕を詠み込まずに『あはぬ恋』を総括的に詠出していたことを思えば、『あひての恋』においても、元来はこの部を総括するもう一首が存したとも考え得る」との指摘がある。<sup>(20)</sup>勿論、伝本には本文の乱れや語句の欠損もあるため、歌が欠落する可能性もある。だが、諸本はすべて同歌数であり、「一首不足歟」の注記が中之島本のみである点には注意する必要がある。<sup>(21)</sup>

これまで「あひての恋」「あはぬ恋」というテーマや地名の多用を確認したが、その両部の歌同士に照応を保つ配置は認められなかった。従って「あはぬ恋」の最終49が地名を詠まず、「あひての恋」の最終58が地名を用いるという理由で、一首の欠落とは言いにくく、

このことは慎重に考えたい。

本集の部立は、四季では秋のみが九首である。以下、わかれ七首、無常九首、いのり九首、物名四首、題詠七首など、歌数は不揃いである(表3参照)。このことを、百首歌という観点から考えてみよう。

表1のように、百首歌は一人の作者が百首をおおよその目安として詠んだもので、歌数に多少の増減がある。後の百首歌では、『重之女集』は九〇首、『和泉式部集』は九七首など、百に満たない例もある。

百という定数について、久保木寿子は「この観念数による枠組みは、詠歌の具体的な『場』を不要にする」と指摘する。<sup>(21)</sup>また、兼築信行は、百の「和歌をもって、ひとつの完結した世界を建立する」と述べる。<sup>(22)</sup>詠歌の場が定数内の完結した世界に展開するという、これらの指摘に首肯する。

百首は、一息に読んで意味を掬い取ることが可能な数である。歌は個々の部立に抱懷されるが、百首歌全体で捉えるとき、部立毎の歌数の不揃いは、いわば濃淡のアクセントであり、作者の創意を示す箇所と言えるのである。

表3 『海人手古良集』に用いられた地名

部立・歌数	地名
四季39 (秋のみ9)	9
あはぬ恋10	9
あひての恋9	8
わかれ7	4
無常9	0
いのり9	2
物名4 題詠7 増補1	5
総計95	37

歌番号・地名(国名)。(初)とは本集が初出と考えられる地名や複数の地名の組み合わせが初例であることを示す。

春・1みよしの(大和)、7みちのく(陸奥)。夏・14よどの(山城)、16をぐら山(山城)、18かも(山城)。秋・27高砂(播磨)。冬・31陸奥(陸奥)、34宇治(山城)、37しら山(越前)。

40かさま(常陸か)、41あふさか(陸奥・名こそ(近江・陸奥(初))、42清見が関(駿河)、43みちのく・さはこのみゆ(陸奥(初))、44すはの海(信濃(初))、45ひたち(常陸)、46しなの・あさまが山(信濃(初))、47あづまち・はまなのはし(遠江(初))、48いくたのうら(撰津)。

50こゆるぎ(相模)、51いはばし・かづらき(大和(初))、53むさし・さらの山(武蔵(初))、54美作・くめのさら山(美作)、55するが・ふじのうら(駿河(初))、56みちのく・しのぶもぢずり(陸奥)、57ひるま(尾張か)、58あふ坂・下ひもの関(近江・陸奥(初))。

60みちのく(陸奥)、61みくまの浦(紀伊)、64生の松原(筑前)、65いなくらやま(不詳)。

82大原の小塩山(山城)、83かすが(大和)。

84ただすの神(山城)、86びびきのなだ(播磨)、87しかすがのわたり(三河)、92いきの松原(筑前)、93は歌題、あふさかのせき(近江)。

表3を見ると、恋部以外は、地名は一首に一つ用いられるのみである。初出地名は見えず、一首に複数の地名を組み合わせるなどの工夫もない。地名は山城が最も多く六首(14・16・18・34・82・84)。続いて大和(1・83)、播磨(27・86)、近江(93)、紀伊(61)などの順で、いずれも都周辺に集中する。恋部の地名は、東国に偏りはあるが広範囲で、他の部立との用法の相違が歴然としている。

## 五 地名のない歌

曾禰好忠が積極的に地名(歌枕)を用いたことはよく知られ、島田良二の論に詳しい。島田によれば、歌枕(島田は「歌枕」と呼称する)は「毎月集」「百首歌」に積極的に採り入れられ、『万葉集』や『古今集』所見の地名との重複、影響が見られるが、趣向を変え独自の個性をうち出しているという。また、好忠が好んだ、序詞に歌枕(地名)を詠み込む例に二五二「すみよしのならしのをかたまつくりかずならぬ身はあきぞかなしき」、枕詞を伴う例に三三三「ちはやぶるかみなびをかのならのはを雪ふみわけてたをるやまびと」などを挙げ、詠作の特色としている<sup>(23)</sup>。

初期百首歌群の「好忠百首」の地名歌は計二二首。内訳は四季四首、恋一首、杏冠九首、物名八首である。だが、恋部では四一〇の「ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行へもしらぬこひのみちかな」の一首のみと少ない。「ゆらのと」は平安期に好忠が最初に用いた

地名であり、序詞に地名を詠み込む例でもある。梶緒が切れあてでなく漂う情景に、恋の行方を象徴させ、恋の叙景としている。

恋部に地名歌の割合が高いのは「重之百首」八首、「惠慶百首」七首である。地名の用法は平明であり、例えば「重之百首」三〇一「こひしさをなぐさみがてらすがはらやふしみにきてもねられざりけり」は、「菅原や伏見（菅原の伏見の里）」と地名を並べ、「伏見」と「臥し」が掛詞、「臥し」から「寝」を導き出す。

「惠慶百首」二四六「あふことのまどほにあめるいやすだれいよいよわれをわびさするかな」は、「間遠」と、編み目の荒い伊予すだれのイメージとを重ね、「伊予」が「愈愈」の畳語に結びつき、「われをわびさするかな」と心情でまとめる。

地名の初出例は、「重之百首」三〇五「まつしまのいしまのいそにあさりせしあまのそでこそかくはぬれしか」の「松島」、「惠慶百首」二五五「こひわたるかげやみゆるといもがきるみもすそがはのわたりへぞゆく」の「御裳濯川」<sup>24</sup>である。斬新な地名によって新奇な歌の詠出を目指すことは、『海人手古良集』の地名の用法に通じる。

『海人手古良集』の両恋部は一七首に地名を用いる（表3参照）。

これは両恋部の約九割に当たる。地名の多用は集の独自性と言えるが、好忠とは異なる点が見られる。和歌に詠まれていない未見の地名を用いることに加え、地名と国名を組み合わせる、あるいは新たに複数の地名を組み合わせるなど、実験的な創意を出現させている。

地名の選択は、一見無作為のように思われるが、題号の「海人」

と関わりのある海辺に偏向せず、山間の関所、山名など、山に関連する語句もほぼ同数取り入れる。つまり、詠歌空間を、あたかも自然界のように山海の均衡を保って展開させるのである。

さらに、空間の創出のみならず、地名を修辭に結び付ける。同音で両意をもたせる掛詞が最も多く、縁語、比喩、同音反復、畳語、頭韻などが見える。その他、地名からの連想、例えば「あさま山」から「あさまし」、「まだゆるされぬ下ひもの関」から「共寝が許されないこと」を促す。

このように地名は、所在情報、音の響き、連想による転換など、空間を示しつつ、恋の内省を普遍的に定位することと連動している。では、恋部の地名のない歌を、どのように考えればいいのか。「あはぬ恋」「あひての恋」にはそれぞれ一首、地名を読まない歌が配される。この二首について、語釈と歌意を示し考察したい。

49 たそかれに涙の玉をながめつつねむらで夜はにあかすともし火  
（あはぬ恋）

52 ひまもなく涙に袖をぬらしつつ駒にまかせてかへるよなよな  
（あひての恋）

「あはぬ恋」49の「涙の玉」は、涙を玉に見立てた措辭で、『古今集』哀傷・八四一に、

ちちがおもひにてよめる ただみね

ふぢ衣はつるるとはわび人の涙の玉のをとぞなりける

がある。喪服のほつれている糸は私の悲しみの涙をつなぐ緒となつ

た、の意。49の「涙の玉をながめ」とは独自表現だが意味が取りにくい。「ねむらで」は、他本に「ねふして」（慶応本・中之島本・穂久邇本）、「ねふらて」（唐紙本）などがある。「ねふらで」は、「ねむらで」の音韻交替である。「ねふしてあかす（寝臥して明かす）」より「ねむらであかす（眠らで明かす）」の方が状況的には相応しく、あるいは「ねふして」は「ねふらて」つまり「し」は「ら」の誤写かもしれない。

下の句「ねむらで夜はにあかすともし火」も独自表現であり、歌意は、黄昏に物思いにふけて流した涙を思いながら、眠らず夜半に燈火をともし、そのまま夜明かしをしてしまおうです、となる。歌の地名は明確に示されるので、第五句の「あかす」は地名ではないと判断した。

中之島本の頭注は49の典拠を『白氏文集』「長恨歌」の一節「夕殿螢飛思悄然 孤燈挑盡未成眠 遲遲鐘鼓初長夜」とする。<sup>(26)</sup>歌に楊貴妃の不在を嘆く玄宗の心情を見たのである。「あはぬ恋」の掉尾に地名を詠まず、逢瀬が叶わない空虚と憂いを余韻として、「あはぬ恋」部を総括したか。

「あひての恋」52の下の句「駒にまかせてかへるよなよな」も独自表現である。絶え間なく流れる涙で袖を濡らしながら、道を知る馬に身を委ねて帰るのを夜ごとに繰り返している、の意。共寝できないまま帰る様子を、駒で帰る毎夜の姿で見せる。

「よなよな」の語を用いた歌には、『兼盛集』三八に「あふ事な

きつつかへるよなよなはいたづらねにもなりにけるかな」があり、上の句「逢う事が無く、泣きながら帰る夜な夜な」や「いたづらね」（寂しく独り寝する）の語句など、恋の状況をさらに描いており、52の類型歌と思われる。

また、52は漢籍享受歌であり、<sup>(26)</sup>漢籍の影響が指摘される49と同様、特定の地名を詠まない歌と判断した。漢籍を透かし見せることで、唐土を連想させようとしたか。この点は集全体から考察する必要があり、今後の課題としたい。

地名のない歌をそれぞれの部立に一首ずつ置くことには意味がある。地名を欠落させることにより、「あはぬ」は勿論のこと、「あひて」でも充足することのない恋の本意を示唆していると考ええる。

## 六 おわりに

最後に本稿の結論をまとめる。

本集は百首歌の体裁をとる家集である。百という定数は、創出した部立を包含し、一息に歌を読み取ることができる数と捉えられる。本集を総体で把握すると、個々の部立及び歌数の増減はアクセントであり、創意の要所でもある。

本集の恋部は、「逢ふ」前後を二極化し「あはぬ恋」「あひての恋」と構成する。初期百首群の中で、この両部立を揃えるのは本集が初であり、このことは本集の独自性、先進性と言える。「あはぬ恋」

では、願望や懊悩の歌を詠み、「あひての恋」でもまた、逢えたがゆえの煩悶を詠出する。つまり、両部共、歌に詠むべき本意を恋の苦悩に見ているのである。

本集以前の家集において、「あはぬ恋」「あひての恋」題は『躬恒集』(V)『忠見集』に見える。これらは部立ではなく、歌合の歌題に応じた歌と考えられ、「あはぬ恋」「あひての恋」の歌題や部立の遡源は、歌合にあると思われる。

地名の多用は、初期百首群に顕著である。中でも好忠が知られ、序詞に地名を詠み込む、枕詞を伴うなどの特色がある。だが、恋部に限ると「好忠百首」の地名歌は一首のみで、地名の多用はむしろ「重之百首」「恵慶百首」に見られ、初出地名によって斬新さを表す手法は本集に通じる。

本集は恋部の約九割に地名が見える。そこには、国名と地名を組み合わせる、複数の地名を併用するなどの実験的な創意がある。地名のない歌を両部に各一首配する趣向は、地名の欠損によって充足することのない恋の本意をも示唆する。

未見の地名、あるいは汎用性のある地名は、その音によって他の語句へと誘導し、地名が生むイメージを保ちながら、別のイメージへと導き、恋部に広域の仮構空間を展開する。さらに、掛詞をはじめ多種の修辭の駆使が、恋情表現や歌意に多層化をもたらす。

すなわち、二極化した恋部における地名の多用は、恋の内省を、仮構空間において普遍的な情として捉えようとするための機軸

なのである。

#### 注

- (1) 先行研究は以下の通り。吉田幸一「海人手児良」と「よかけ」(『王朝文学』一〇、一九六四・五)。藤岡忠美「沈淪のうた」(『平安和歌史論 三代集時代の基調』桜楓社一九六六)。山口博「第三章 藤原師氏と海人手子良」(『王朝歌壇の研究』桜楓社一九六七)。北村杏子「藤原師氏瞥見」(『解釈』一九八四・一一)。三木麻子「海人手古良集について」(『夙川学院短期大学研究紀要』三八、二〇〇九・三)。三木麻子「海人手子良集」解説(『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』(片桐洋一他著、青簡社二〇一〇、『新注』と略称)。

- (2) 曾根誠一「海人手子良集」試注(『花園大学国文学論究』一九、二一、二九、一九九一、一九九三、二〇〇二)。「試注」と略称。注釈書は注(1)の「新注」がある。

- (3) 諸本の多くは定家本系統である。底本書院部本の書写年代は「天明二年(一七八二)か、その後(山口博執筆「海人手古良集(師氏) 解題」、『新編国歌大観』、日本文学 Web 図書館。以下、『新編国歌大観』は同書に拠る)。

主な諸本と本文中の略称を挙げる。『海人手子良集 唐紙本』、唐紙本(冷泉家時雨亭叢書20『平安私家集 七』所収、朝日新聞社一九九九)。書院部御所本(五〇一・三九二)、御所本(新日本古典籍総合データベース。慶應義塾大学図書館本、慶応本(北村杏子「海人手古良集の題名及び諸本、付校本」、『寝覚物語対校・平安文学論集』所収、風間書房一九七五)。内閣文庫蔵本(二一七・一一)、内閣本(佐藤高明『天曆歌人の資料と研究 本文資料篇』ひたく書房一九八五)。大阪府立中之島図書館本、中之島本(田中仁「大阪府立中之島図書館所蔵海人手子良集」、『古代文学研究』二、一九七七)。

- (4) 清輔の『奥義抄』序に「海々々手古良(師氏大納言集)」(『日本歌

- 学大系』第一巻所収、風間書房一九五八)。定家の『集目録』に「あまのてこ」〔枇杷大納言〕(口は剥落)と見える(冷泉家時雨亭叢書14『平安私家集一』)所収、朝日新聞社一九九三)。
- (5) 山口博執筆「海人手古良集(師氏) 解題」(注3)参照。『新注』94番歌補説に、95は『新古今集』雑中・一六二六からの増補とある。
- (6) 増田繁夫執筆「歌枕」項(『和歌文学大辞典』、日本文学Web図書館)。
- (7) 久保木寿子は「結果的に初期百首受容の過程で様々に形態を変えるのが、この『雑』相当部分」という(『和泉式部の方法試論』新典社二〇二〇)。
- (8) 鈴木宏子『古今和歌集』の想像力(NHKブックス二〇一八)。
- (9) 『躬恒集』(V)は、正保版歌仙家集本に拠る(『新編私家集大成』、日本文学Web図書館)。
- (10) 例えば「不会恋」二五は、『拾遺集』恋五・九八八「題しらず・よみ人しらず」、三四は、『統千載集』恋四・一五三七「平貞文家歌合に、会後恋」  
「貫之」と入集。が、三四は家集に見えない。
- (11) 片桐洋一・中周子執筆「左兵衛佐定文歌合解題」(『新編国歌大観』)。
- (12) 『麗景殿女御歌合』は歌題のみを取り上げた。
- (13) 本集から勅撰集に九首入集。8、21、24、39:『新勅撰集』。42:『新統古今集』。60、71:『統後拾遺集』。70:『統千載集』。95:『新古今集』。
- (14) 『更級日記』(『更級日記』は吉岡曠校注、『土佐日記』蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記)、新日本古典文学大系24、岩波書店一九八九)。
- (15) 『蜻蛉日記』(今西祐一郎校注、注14参照)。
- (16) 久保田淳執筆「諏訪の海」項(『歌ことば歌枕大辞典』、日本文学Web図書館。以下、「歌ことば歌枕大辞典」は同書に拠る)。
- (17) 『古今和歌集全評釈(上)』三八番歌語釈(片桐洋一、講談社学術文庫二〇一九)。
- (18) 思ふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくどくるしたひも(『古今集』恋一・五〇七・よみ人しらず)。
- (19) 曾根誠一「『海人手古良集』の和歌欠脱箇所について」(『花園大学国文

学論究』二一、一九九三・一一)。

(20) 『新注』58番歌補説。

(21) 久保木寿子「第二章 初期定数歌の成立と展開」の「第一節 初期百首と私家集―『好忠百首』を中心に―」(注7)参照)。

(22) 兼築信行「藤原定家(明静)の嘉禎三年」(『國語と國文学』二〇一九・一一)。

(23) 島田良二「好忠集」における歌枕の技巧について(『好忠集』における歌枕について)(『王朝和歌論考』風間書房一九九九)。

(24) 紙宏行執筆「松島」項。柏木由夫執筆「御裳濯川」項(『歌ことば歌枕大辞典』)。

(25) 金沢文庫本は「秋燈挑盡未能眠」(『金沢文庫本 白氏文集(一)』、川瀬一馬監修、大東急記念文庫一九八三)。中之島本は、3、6、36、68番歌も「白氏文集」を典拠とする。

(26) 『韓非子』説林上「管仲曰、『老馬之智可用也』乃放老馬而隨之、遂得道」(台湾師大図書館【寒泉】古典文献全文検索資料庫 <http://skqs.lib.ntnu.edu.tw/dragon/>)。

※和歌の引用・歌番号は、特に断らない限り『新編国歌大観』『新編私家集大成』に拠り、家集などの成立年はこれらに基づく。

※地名については、吉原栄徳著『和歌の歌枕・地名大辞典』(おうふう二〇〇八)も参看した。

【付記】 本稿は令和元(二〇一九)年度早稲田大学国文学会大会における口頭発表をもとに成稿したものである。